

萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業
2013→2015 活動報告書



Contents

内容

事業のコンセプトとプロセス	… 1
おたからの登録基準	
おたからの見つけ方	
おたからの分類	
おたからカルテ（データシート）の書き方	
各年度の取り組み	… 3
地域おたからワークショップ	… 4
講演録：「萩まちじゅう博物館おたから再発見」	… 5
各地区・地域の取り組み	… 10

萩のおたから（文化遺産）とは…

「萩市民にとって身近なものや大切にしたいもの、受け継いでいきたいこと」

- ・ 地域らしさを作り出している「もの」や「こと」
- ・ 地域のことを物語る上で欠かせない「もの」や「こと」
- ・ 地域のたからとして大切に守り伝えていきたいと思う「もの」や「こと」

事業のコンセプトとプロセス

萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業では、地域のおたからを再発見して、「萩のおたから」として地域から推薦し、市民が互いに認め合い、データベースで公開して活用する取り組みを行っています。これからも、萩のおたからを未来に引き継ぐため、萩市民が協力しあい、守り育て、いかす（生かす・活かす）活動を進めていきます。

「おたから」を継承する意識を持つ

変化の激しい現代の世の中で、全てのおたから（文化遺産）を守り続けることは容易なことではありません。しかし、それを自然に任せて無意識のうちに失っていくことと、意識を持って「これは私たちの地域の大切なからなのだ」「できるだけ守り伝えていこう」「保存が難しければ、せめてきちんと記録していこう」と継承の努力をしていくこととは、大きな違いがあります。

現代の暮らしの中でいかす（生かす・活かす）

おたから（文化遺産）は、決して、凍結的に保存することだけが継承の手段ではありません。積極的に紹介され、活用され、あるときは新しく作られるもののモチーフになり、現代の人々の暮らしの中で生かされていくことこそ、最大の継承の手段であると考えます。

おたからをお互いに認め合う

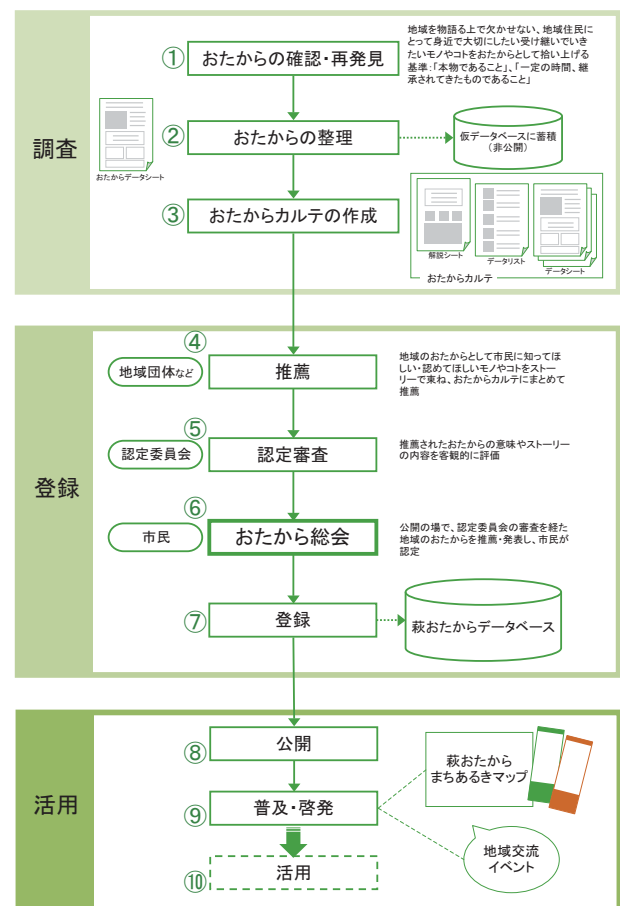
本事業では、文化遺産の調査・記録作成事業、認定事業、データベースの作成、普及啓発・育成事業などを中心とした事業を行っていきます。調査では、地元の人たちが地元を改めて歩いて、地域で大事にされてきたもの・大事にしていきたいものを再発見・再確認し、写真や位置情報、説明などを記録することで、おたからの拾い上げを行っていきます。認定というのは、市民や地域の人々同士が「これはこの地域にとってこういう意味で大切なものなのだから、萩のおたからですね。」と互いに見せ合っ

まずは何が地域のおたからなのかを知る

本事業の最終的な目標は、地域のおたからや隠れた魅力を地域の資源・財産として、まちおこしや観光に活かしていくことです。愛着をもって大事にしながらも現代の感性で使いこなしていくためには、まずは何が地域のおたからなのか、それはどこにあるのか、そこにはどんなストーリーがあるのかを萩市民全員が知ることから始まります。

その基礎資料やしきみをつくるのがこの事業です。

調査・登録・活用のプロセス



おたからの登録基準

「本物であること」
「一定の時間、継承されてきたものであること」

「本物であること」とは、レプリカ（複製品）であつたり、価値の根拠や履歴等があやふやではなく、新正性（オーセンティシティ）が説明できることです。

「一定の時間継承されたものである」とは、個人の次元を超えて価値が共有され、大切に継承されてきたもの（おおむね2世代・50年以上がめやす）です。

おたからの見つけ方

調査を通して、地域・地区のおたからを再発見します。地域のおたからを見つける方法として、2つの形が考えられます。

○テーマ先行型

実際に現地を歩く前に、参加者でミーティングを行い、その地域のことを他地域の人や来訪者に説明する際に、どんなテーマやストーリーがあるのか、どんな切り口で伝えていけるのか、意見を出し合い、おたからを抽出するための視点を共有してから、おたからを拾い上げ、カルテを作成していく方法です。

○カルテ先行型

専門家や古老などのアドバイスのもと、その地域らしい建造物や環境物件、祭りや風習、地域の歴史や文化を伝えるものなど、おたからになりそうなものを全てカルテに記入します。それらを整理・グルーピングしていく中で、共通するテーマやストーリーを考えていく方法です。

おたからの分類

萩まちじゅう博物館におけるおたから（文化遺産）には、国・県・市指定の文化財や埋蔵文化財はもとより、そうした従来の考え方では捉えることのできなかった「空間遺産」や「生活遺産」が含まれます。一つの大切なおたからは、この要素の複数の組み合わせによって成り立っていて、この4つの要素で分解・把握していくことが可能です。

○空間遺産

地域空間に埋もれているもので、不動産として土地に根を下ろして動かない遺産であり、これはさらに「空間要素」と「景観要素」に分けられます。

- 空間要素：歴史的な街路や地割り、水路、航路など、地図上で確認できる要素のこと
- 景観要素：地域景観の特性をよく示している建築物や工作物、護岸の石積み、樹木など

○生活遺産

人々の生活に埋もれているもので、動産として移動可能な遺産や形のないものであり、これはさらに「無形要素」と「景観要素」に分けられます。

- 有形要素：民具や美術・工芸品、古文書、自然環境や人間との関わりを持つ生き物など
- 無形要素：祭事や慣習、伝統の技術や方言、昔の物語、重要な人物など

おたからカルテ（データシート）の書き方

通称・名称

地元で使われている名称（通称）を記入する。複数の名称がある場合、括弧書きするか、「概要」欄にメモする。地元では当たり前の読み方でも、他地域の人には読めないものもあるので、ふりがなも必ず記入すること。

写真

おたからの様子がわかる写真を撮る。写真ファイル名と名称は他の人が見てもわかるようにつけておく（5枚まで表示可能）。

由来

そのおたからが、どういった経緯でできたかを書く。「成り立ち」「なぜ」「いつから」例：建物…いつ・誰が・何のために建てたのか、等わかる範囲で書く。

情報源・参考文献

聞き取りの場合：〇〇氏よりヒアリング
20XX年Y月Z日
書籍の場合：編著者・『タイトル』・出版社・出版年 ページ番号
その他備考・メモも記入する。

場所・所在地

「公式な住所」をできるだけ番地まで埋めていく。住所のないものは「〇〇の隣」などで場所が特定できれば、それでも良い。

地区名

番地などの「公的」ではなく、地元の人にわかる地名。字や昔から伝わる通称的なものを含む。

緯度・経度

まずは、地図上の位置を確認して、インターネットのマップで緯度・経度を調べて書く。

説明

概要や由来の内容を簡潔にまとめる（200字～250字以内を目安にする）。説明に書いてある内容は、概要や由来のいずれかに書かれてあるとよい。

概要・特色

大きさ、素材、様式など目で見えてわかることを書く（詳しい資料は別紙でコピーを添付）。

各年度の取り組み

平成 25 年度の活動	2013	1月31日	第1回実行委員会
		6月21日	第2回実行委員会
			地域おたからワークショップ
		8月18日	地域おたからワークショップ in 旧松本村／明木 入門講座「萩まちじゅう博物館おたから再発見」講師：西山徳明教授 ワークショップ 松陰神社境内／明木周辺でおたから調査 おたから情報の整理
		9月～	各地（浜崎・旧松本村・むつみ・旭）で 現地調査・資料調査／地域おたからマップ原稿作成 地域交流イベント企画・準備
			旧松本村地区 地域交流イベント
		10月12日	「維新の里歩こう会」
			むつみ地域交流イベント
		11月16日	「晩秋のむつみを満喫しよう！」 旭地域佐々並地区 地域交流イベント 「ささなみ伝建まちなみ探訪！」
			旭地域明木地区 地域交流イベント
平成 26 年度の活動	2014	1月18日	「明木でくたく見て歩き ～カメラとおさんぽ編～」
		12～1月	各地で推薦するおたからの検討・推薦資料作成
		2月18日	文化遺産認定委員会
		2月23日	第1回萩まちじゅう博物館おたから総会 各地域からおたからを推薦発表、 市民が「萩のおたから」として認定
	2014	4月23日	第3回実行委員会
		5月～	各地（堀内・平安古・城下町、土原、川上、福栄、三見）で 現地調査・資料調査／地域おたからマップ原稿作成 地域交流イベント企画・準備
			地域おたからワークショップ
		6月25日	「地域のおたからをつなごう」 講師：西山徳明教授 萩博物館講座室においてトレイルづくり
			福栄地域 交流イベント
		8月31日	「世界遺産候補と福栄の実りを先取りしよう！」 土原地区 地域交流イベント
平成 27 年度の活動		10月11日	「土原の歴史を散策する会」 地域おたからワークショップ
		11月10日	「フェノロジーカレンダーを作ろう！」 講師：西山徳明教授、真板昭夫教授 萩博物館講座室においてフェノロジーカレンダー（季節暦）づくり
			川上地域交流イベント
		11月14日	「紅葉の長門峡を訪ねて」
	2015	12～1月	各地で推薦するおたからの検討・推薦資料作成
		2月18日	文化遺産認定委員会
		2月23日	第2回萩まちじゅう博物館おたから総会 各地域からおたからを推薦発表、 市民が「萩のおたから」として認定
	2015	4月23日	第4回実行委員会
		5月～	各地（川島・藍場川、笠山・越ヶ浜、須佐、田万川、大井）で 現地調査・資料調査／地域おたからマップ原稿作成 地域交流イベント企画・準備
			大井地区 地域交流イベント
		5月30日	「北浦の王都 阿牟（あむ）の里 見て歩き」 笠山・越ヶ浜地区 地域交流イベント
		5月12日	「漁業集落・越ヶ浜の暮らしの歴史と笠山の自然を巡る」 田万川地域交流イベント
		5月17日	「秋の田万川ツアー ～海彦・里彦・山彦 三彦を巡る旅路～」
			地域おたからワークショップ
		11月2日	「おたからの活用を考えよう ～実践編～」 講師：西山徳明教授、浜崎しゅる会の皆さん 町並みトレイルツアーを体験し、様々な活動事例紹介などを通しておたからの活用を考える
			須佐地域交流イベント
		11月28日	「幕末・明治維新と日本の近代化を支えた須佐の歴史探訪ツアー」
	2016	12～1月	各地で推薦するおたからの検討・推薦資料作成
		2月18日	文化遺産認定委員会
		2月24日	第3回萩まちじゅう博物館おたから総会 各地域からおたからを推薦発表、 市民が「萩のおたから」として認定



地域おたからワークショップ



地域おたからワークショップ in 旧松本村／明木 （2013年8月18、19日）

まず、入門講座として、西山教授から萩市や太宰府市、海外での事例と共に、地域のおたからの再発見がなぜ重要なのか、地域のおたからをどう守り育て生かしていくか、などについて学びました。その後、18日には松陰神社境内、19日には明木周辺で、おたからの拾い上げ調査とカルテへの情報整理を行いました。最後に班ごとに発表し、西山教授から講評を受け、「意見が分かれた場合には両論併記して、情報を捨てずに記録し、判断は後世に委ねること」、「人に説明する時には短く・わかりやすくするが、それを裏で支えるデータには惜しみなく情報を記録すること」、「誰から聞いた、何の本に載っていた、という情報源を忘れずに書くこと」など、これからの調査で大切なポイントを学びました。

地域のおたからをつなごう！ （2014年6月25日）

西山教授から、博物館活動としての萩まちじゅう博物館の考え方や、来訪者が地域のおたからに出会えるようにするためのしくみとしてのコア・サテライト・トレイルの重要性、インドの「ヘリテージウォーク」という地元の生活の場や宗教の場を巡るトレイルツアーの例を学びました。また、世界遺産を事例にしたおたからの名前の付け方として「説明的であること」「名前を聞けばイメージが湧くこと」「固有名詞に少しの説明を付けるか説明を先にして形容詞的に最後に名称が来るようにするなど工夫すること」などを学びました。その後、グループに分かれて各地域のおたからのテーマやストーリーを考え、まとめ、それらを巡るトレイルコースを作ることを体験し、地域ごとに発表して、今後のおたから調査やトレイルづくり・マップづくりに発展させていくことを確認しました。



フェノロジーカレンダーを作ろう！ （2014年11月10日）

西山教授、真板教授から、エコツーリズムについての講義を受け、①地域の人達が誇る資源を保全して、かつ地域にお金落ちて地域が活性化するために観光を導入する仕組みづくりがエコツーリズムであること、②自分達の誇りをベースにしながら、外から来る人に情報を提供し、ホスピタリティにのって、その人達と関係を結ばせるために、ワクワクドキドキするような仕掛けづくりが大事であること、③「宝探し」から「地域づくり」への展開として、「探す→磨く→誇る→伝える→活かす（興す）」という段階が必要であり、特に萩では、次の未来の人達に向けた新しい萩のブランドや商品をつくる「宝興し」が大事であること。などを学びました。そのひとつとして、ツアープログラムの商品化があり、地域のおたからを季節毎に整理し、ストーリーのある商品にするための基礎資料としてのフェノロジーカレンダーづくりを体験しました。

おたからの活用を考えよう ～実践編～ （2015年11月2日）

各地域で再発見をし、データベース化を進めている「おたから」について、「おたからの活用」を考えるため、まず、京都のまちづくり団体の皆さんと合同で、まち博のなかでも先行的なサテライトである浜崎の町並みトレイルツアーを体験しました。その後、浜崎の味覚である釜揚げちりめんの加工場を見学、昼食でも味わい、午後は、萩や京都の活動事例紹介と意見交換を通して、おたからの活用＝事業化・経済活性化に向けた共通の課題やヒントを見つけ、各地域で実践するための方策を考えました。意見交換の中では、「自分たちの地域のことは自分たちでやる」という自主性の大切さなどが改めて確認されていました。



地域おたからワークショップ入門講座

萩まちじゅう博物館おたから再発見

北海道大学 観光学高等研究センター 西山 徳明

はじめに

おはようございます。北海道大学の観光学高等研究センターの西山です。3年半前までは九州大学にありまして、1998年から浜崎の伝建地区保存対策調査で入ってから萩市とずっとおつきあいさせていただいています。その後、2000年頃から、新しい博物館建設の構想委員会にも入って、そこでたまたま私の方で「まちじゅうが屋根のない博物館」という考え方、ただ博物館を造るというだけじゃなくて、それを町全体に展開するような、エコミュージアムの考え方を、博物館建設にリンクさせて大きなまちづくりに展開するような、そういう事を考えませんか？と提案しました。これが思った以上に取り入れていただいて、その後2004年の萩博物館および萩まちじゅう博物館の同時開館までの準備をお手伝いした経緯もあります。実際に博物館が開館した後は、萩市の行政の方のもとより、NPO 萩まちじゅう博物館の方々の活動によって、萩博物館及び萩まちじゅう博物館の活動は全国的にも注目されています。まだ途中だと思いますが、非常に成功しつつある事例だと知られているものだと私は思いますし、関わった事を非常に光栄に感じています。とは言っても2004年に開館して今年で10年目、来年で11年目に突入するという中で、このまちじゅう博物館という活動を次の10年、20年、どう展開していくか、グレードアップしていくような提案もしていかなければと考えているところです。

ただし、まちじゅう博物館という活動は、博物館活動ですから、「博物館的なまちづくり」ではなくて、きちっとした博物館活動である。しかし、博物館の学芸員だけがやる博物館活動ではなくて、市民の皆さんが学芸員となって探究者なり発見者なり記録者になって展開していくという、まさに「まちじゅう博物館」の活動です。

そういう中で、国からの補助を受けることが出来て、これから3年間の「博物館活動」の基盤となる、文化資源・文化遺産（おたから）をしっかりと市民活動として掘り出して再発見していった、まちじゅう博物館活動の礎を強固のものにしていく、あるいはより豊かなものにしていく文化遺産活用事業が始まりました。それが結果としてはデータベースとしてきちっと資料として管理されて、それがお蔵入りする資料ではなくて、例えば、観光まちづくりや景観まちづくりに使われる、学校教育に使われやすく、また有意義な資料となっていくようなデータベー

スを作っていこうというのがこの3年間の事業の目的です。今日はその最初のワークショップということで皆さんと一緒に1日活動したいと思います。

まず、この考え方の基本的な部分をご説明します。この事業というのは萩のまちじゅう博物館の活動がモデルとなって「歴史文化基本構想」や「文化財の総合的な把握」という言葉で文化庁の政策そのものになっています。選ばれたエリートを文化財として、税金で手厚く守っていくような従来の文化財保護行政を「トップダウン」と私は言っていますが、そういう文化財行政とは違う、地域の方々が自らの絶対評価、「あっちよりこっちのほうがいい」というような相対評価ではなくて、「いいものはいい」、「守るべきものは守る」、「伝えるべきものは伝える」と考えたものを惜しみなく拾い上げてやる、そういうボトムアップ、草の根の考え方で、文化財の総合的な把握を行います。そして、それを自治体として、大きな歴史文化まちづくりのマスタープランを作って推進していきましょう、という政策がすでに文化庁では動いていて、全国のいろいろなモデル地区で趣向的に計画が作られ、さらに裾野を拡げていこうとしています。私自身は、萩のまちじゅう博物館に関わったこと、それと同時期に太宰府市の文化財の総合活用をお手伝いしていたこと、その2つの地区の取り組みがモデルとなって、そのまま文化庁の政策に展開していった経緯がある関係で、今はその分野の責任を持たされています。

伝統的な地域資源喪失への気づき

まずスタートの話です。伝統的な地域の資源が猛烈な勢いで失われていく。これは私が最初にその政策の必要性を訴えるために文化庁でレクチャーした内容ですが、1998年に萩の川内の全体を九大の研究室で、建物、墓地、庭園、みかん畑、水面、土堀、石垣、玉垣、生垣、レンガ堀、祠、鳥居、石碑、石海岸などいわゆる歴史的景観を構成している要素をしっかり調査したものです。



それらがこれだけ残っていること自体、日本の中央都市では考えられないことですので、文化庁の担当者をして川内地域全域が伝統的建造物保存地区になってもおかしくないのではないかと寄せたほどのものです。

ところが、1998年にそういう建物が1,600件、それ以外の樹木や塀が4,000件近くあったものが、5年後に調査したところ、1割ずつ減っていたという驚くことがありました。萩市の場合は堀内・平安古・浜崎地区は保存地区なので、ほとんど減ってないとなると、他の地区では10%どころか12～13%の割合で減少しているかもしれません。

これを文化庁の偉い先生方がいる中で、「こんな事が地方でも起こっているのだ」、「5年で1割、10年で2割、…50年でなくなってしまうのですよ」、「こういう激しい文化遺産の損失が起きていることを皆さん本当に実感してくれているのですか」と話しました。高度経済成長とかバブルの時は、新しいものをつくるたびに古いものを壊していききましたが、今は手入れされなくなったものが自然に失われていく、相続で家が解かれていく。ある意味、今の社会の中で放っておいたら失われていく割合がこれなのです。こういう事を放置していいのだろうか、という問題提起でした。

しかし、それは萩固有のものかもしれない、とすぐには信じないのが役人ですから、そこで全国の他の調査がないものかと探しました。すると東京の下町の非戦災だった谷中という地域では、東京芸大が中心で調査をやっていて、15年で3割が減っていました。3年で15割ということは2年で10割ですから、萩で出た数字とほぼ一緒です。そして、金沢市の調査では5年間で11～12%の減少でした。ほとんど全国で同じことが起きていることがほぼ証明されて、これで文化庁も文句が言えなくなった、といういきさつがあります。

埋蔵文化財から生まれた新たな遺産概念

そういう事に対して何とかやろう、と動き始めたのですが、その時に私が説明として使ったのが、1970年代の文化財保護法の改正で制定された埋蔵文化財の概念です。これは簡単に言うと、地中に埋もれていてまだ掘ったら出るかもしれないものがある場所には、あらかじめマーキングを全国の自治体でやっておいて、そこで開発行為をやるときには発掘調査をやってからでないと出来ない、発掘調査は開発者負担で開発者がやりなさい、という制度です。文化庁は、地下にあって、まだあるかわからない物が文化財なのだと宣言したのです。

その一方で、先ほど言ったように、「今まさに1～2割

の割合で減っている、地上にあるものをよく再評価しないのですか」「地域空間に埋もれていて価値が顕在化していない文化遺産もあるでしょう」「地下に埋もれているだけじゃない、地上にもあるんだ」と私が問題提起をしたのです。ただ名前がないと弱いので、空間にかかわる遺産、生活にかかわる遺産と名前をつけました。

●埋蔵文化財の概念から生まれた新たな遺産概念

【埋蔵文化財】

地下に埋もれていて価値が顕在化していない文化財

↓ ならば

『空間遺産』

地域空間に埋もれて価値が顕在化していない遺産

『生活遺産』

人の生活に埋もれていて価値が顕在化していない遺産

空間遺産というのは地域空間に埋もれているものです。萩市の場合、例えば毛利藩政時代に引かれた都市計画、明木や佐々並であれば萩往還が通って、往還道に沿って造られた町としての歴史がある。江戸時代から通ってきた道が明治・大正・昭和・平成と流れてくる中で、あるものはうち捨てられ、あるものはそのままの形態で残っているかもしれない。そういう道筋や水路の水系など、昔の地図にあったところを重ね合わせていくとその意味がわかる。例えば、間口何間で並んでいるような街道の町というのは、昔の図面と重ねてみると、ここのお宅は江戸期から同じ間口で同じ場所にあったのだな、とわかります。そういう筆界や地割の線、水路や道筋などを空間要素と呼びます。パッと見た目では新しいブロック塀が立っていても、実はそこの境界が江戸時代からあれば、そこに境界があったという歴史が空間要素となります。発掘調査で古代の道筋がわかれば、地図上に記録され、それが空間要素になります。

それに対してそれを証拠づけているもの、筆界に土塀が残っていれば、この土塀は目に見えるから景観要素と呼んでいます。あるいは道沿いの商人の町に町家が並んで残っていれば、それ自体がわかりやすい景観要素です。古い老木が残っていて、これが昔、解かれた町家の中庭に生えていた木だったというのがわかると、ただポツンと立っている木ではなくて、歴史的に意味がある木、景観要素になります。

それに対して、生活に埋もれているものが生活遺産です。有形要素というのは、いろいろな民具や骨董品のようなもの、古文書、絵馬などの動産です。例えば個人の

蔵や神社、お寺にそういうものが眠っているのかもしれませんが。無形要素というのは伝統の技術や方言、昔の物語などです。経験上、この4つの要素でとらえられないものはないと考えられます。一つの大切な遺産、文化財などはこの要素の複数のものの組み合わせによって成り立っていて、遺産はこの4つの要素で分解・把握していくことが可能です。

文化遺産（資源）の登録基準

2005年に作ったおたからハンドブックでは、そういう資源を拾い上げるときの基準を示しています。ただ「ここはみんな大事なもの」、「私が大事なもの」というのを持ち寄っても、玉石混淆でガラクタ行きになってしまいますので、2つだけ基準を考えましょうと言っています。1つは、レプリカではなく本物であるということです。来歴や根拠などがはっきりしていない、「古そうである」、「なんかよさそうである」では困ります。

もう1つは一定の時間継承されたもの。結論からいうと50年以上経ったものだと思えます。なぜならば50年間伝えようと思うと、たった一人の努力ではまず無理です。だいたい最低でも2世代がその物の大事さを考えて伝えていったものが50年後に経年性を持つ。個人の次元を超えて、ただ一人の思いを超えて価値が共有されてきたものであること。この2つを満たせば惜しみなく拾い上げましょう、と言っています。それをリスト化していつ、どんどん集めていこうというのが基本的な考え方です。

文化遺産（おたから）の意味

先ほど言ったボトムアップの絶対主義の考え方で拾い上げられたものは、データベースを管理するためのシートに写真・名所・場所・所有者・由来・特徴であるとか、いろいろ調べられるものはきちっとデータベースに残していく必要があります。そういう物を集めるとあつという間に何千何万と集まるのです。文化庁のモデル事業でやった尾道市は最初の1年間だけで、民間のボランティアなどの協力を得てやると、1年間であつという間に2万3万の遺産が集まったのです。みんなは、「たくさん集めたけど、これをどうするの?」という話になってしまふわけです。

そこで、萩市や太宰府市と相談しながら考えた方法は、それを一定のストーリーで説明していくものです。例えば、「萩の城下町」というストーリーであれば、萩の川内を中心としたエリアにあるもので城下町を構成しているものが何百と集まる、ちなみに先ほどの調査では、景観

要素だけで建物が1,500件、他の要素が4,000～6,000件ありました。「城下町」というストーリーをもう少し展開していくと、城下町を成り立たせていたものは三角州だけではなく、本丸からのびた萩往還の道筋や明木や佐々並などの市も、萩の城下町というストーリーの中で重要な構成をするという考え方もできます。

また、例えば「明治維新の志士の足跡」というテーマならば、吉田松陰先生をはじめとした明治に輩出された様々な志士に関連されたものも集まるでしょう。もし「萩焼」というテーマを設定すれば、萩焼の窯元とか、作家そのものの技術、販売している場所や土を採る場所にも昔からのものがあるかもしれないし、そういう様々な要素が組み合わされた「萩焼」という一つの遺産が説明される。このように地域の歴史・文化・自然などを市民が自慢して語りたいストーリーとその証拠群をまとめて、文化遺産（おたから）と呼ぼうという考え方です。

ですから、2万3万と集まったものは、ただずらっと並べられただけでは途方に暮れますが、これが何らかのストーリーで「集合!」と言って号令をかけると、その何万の中からその遺産が集まってくる。有形も無形も、動産も不動産もデータベースで管理されれば、観光開発でいろいろな魅力的な商品になる。観光ツアーをつくろうと思ったら、データベースで管理されたものを集めて、そこから間違いのない奥行きが深いものが出来る。市役所が道路を拡張しようと思った時に、自分の関係するところをデータベースの地図上で調べれば、どういうおたからが関係するかが分かる。そうすれば、それを動かすのか、よけるのか、あるいはやむなくつぶすのだけれども、きちんと記録するのか、を一度は考えることが出来る。そういう事に使えるおたからのデータベース化をやっ

文化資源マネジメントの考え方

有形・無形・動産・不動産といったものはどうであるかということにはこだわらず、ただ地域に存在するあらゆる文化的な資産の個々の要素を文化資源と呼ぼうとしています。

そして、文化資源をマネジメントするということはどういうことなのかというと、いままでは文化財「保護」だと言っていましたが、そうではなくて、はるか何千倍も何万倍もある文化資源というものを「マネジメント」する、要するに保護するだけではなくて、観光や景観づくり、学校の教育、いろいろな活用方法がある。そういうものを全部含んだマネジメントということです。

その第一の目的は、そういった存在を忘れ去られよう

している資産を惜しむことなく拾い上げて衆目の知るところとして、無為の喪失から救うことです。そうした各要素バラバラの文化資源が1つのストーリーのもとに集まって全体としての意味が誰にでもわかるような形で説明されたときにそれを文化遺産と呼ぶのだと、そういう組立型の考え方をします。

そういう意味で、実は萩城下町というのは残念ながら暫定リストの一手手前で惜しくも選にもれましたが、世界遺産にしようということを数年前、一生懸命、萩市役所が中心となって活動しました。その時には三角州及び、玉江、鶴江を入れた周辺、松本川の両方の河川、萩往還がずっとつながって明木、佐々並をいれて防府の港…すべて入れて、一つの世界遺産として登録しようとストーリーを組み立てて、要素を結集したこともあります。世界遺産にするためにやるわけでは当然ありませんが、ただ、考え方は世界遺産であろうが地域の遺産であろうが、おたからという言い方であろうが一緒だと思うのです。その辺を理解していただきたいと思います。

まずは埋蔵文化財、地下に埋もれて価値が潜在している遺産、二つ目は生活遺産や空間遺産として人の生活や地域空間に埋もれていて価値が顕在化していないもの、こういったものをとにかく惜しみなく拾い上げて、とりあえず暫定的にリストに書き連ねていく、一旦書き上げられたものは永久に残るものと考えていいと思います。

永久にといいましたが、ただあっても仕方がない。そういうものをきちんと遺産の所有者の人たちに一つ一つ了解を得たり、「できれば壊さないで持っておいてください」と頼んだりする。別に文化財に指定するわけではないから、公のお金で守ることはできないけれども、「とりあえず大事にしてほしい」、「見守る担当者になってもらっていいですか?」、こんなやりとりで、持ち主や管理者とある程度折り合いをつけて、そのものは文化資源のデータベースの中に整理していく。今ならコンピューターのシステムで管理されていますから、維新というテーマで何千と集まってくる、萩焼というテーマで何千と集まってくる、というように常に管理され、知らせることが出来る状況を作り出すということです。

データベースづくりと遺産登録の重要性

萩市は、「データベースや文化遺産リストが出来たら、それをどう活用するか」に関しては、まちじゅう博物館という仕組みがすでにあるので、そういう意味では萩市は進んでいます。ただ一方でおたからの再発見やデータベースづくりに関して萩市は一步遅れています。それが進んでいるのが太宰府市です。

太宰府市は2007年に西日本新聞に発表して、「条例を定めて市民遺産という制度を創設します」と言って、活動を始めています。その数ヶ月後には、文化庁も「多様な文化財、その周辺環境一帯を保護する」、「自治体が主体となって基本構想を作成して文化財保護の地方分権を行う」、「遺産をいかしたまちづくりにつなげる」、「いわゆる未指定の文化財・お祭りなどの無形民俗も広く対象に含める」と言って、このような政策を国としてやりますと打ち出しています。

なぜデータベースを作るのか改めて考えると、従来はそういうリストを行政が関わって作れば、それを保護しないといけないという行政の強迫観念があったのですが、それを思った途端にリストが作れなくなってしまう。そこで、保護するためではないのだと、その存在自体を知るためにリストを作るのだと、知ることを恐れないでくださいと私はいつも言っています。

太宰府では「太宰府市民遺産」と呼んでいるのですが、共有した市民遺産をどうするのかということ、社会全体(個々の市民の方々、観光だけではなくいろいろな事業者の方々、そして自治体)がみんなで自分に関われる部分で関与していきながら、景観づくりの根拠や観光まちづくりの資源としても使います。中にはそうやって見出したものから改めて文化財として拾い上げられることも出てくるかもしれない。

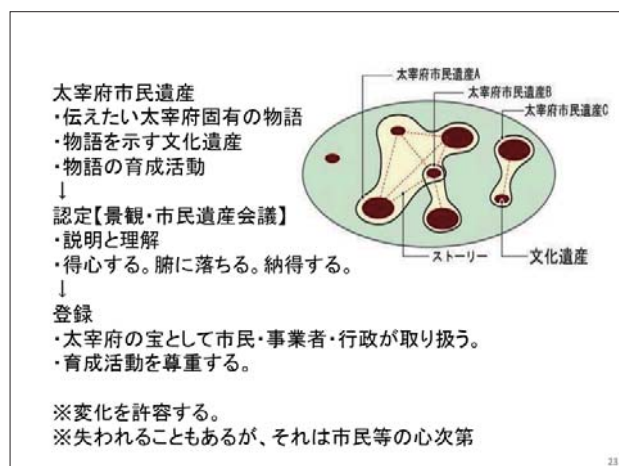
太宰府では、「ボランティア活動を通じて市民のおたからを発見する」、「市民自らが見て歩いて聞いて調べる」、「行政はその活動を手伝ってその活動を尊重するのが行政の仕事である」と、はっきりと言っています。様々な調査をやりながら、それをまとめていってデータベースのシートに管理し、ネット上でこれを公開し、衆目の知るところとする、ということをやっています。



地域の文化遺産はいろいろあるけれども、それを地域の皆さんが支えていく、ということを太宰府では標語しています。

市民遺産は、市民遺産会議というもので認定を始めてすでに3年が過ぎて、3回の会議が開催され、10件近くの遺産が登録されています。まず太宰府市民遺産が何かというと、「伝えたい固有の物語」、「物語を示せる文化遺産」、「育成活動」、それらをセットで市民遺産、ものだけではなくて、それを支える活動も含めて遺産として認定します。「こういう活動がありますから、それを認定してください」と市民遺産会議にかけるわけです。育成団体がしっかりと説明して、それをみんなで理解して納得して腑に落ちたらそれを登録する。

そして市民、民間事業者、行政が、太宰府の宝としてそれらを取扱い、育成活動を尊重する。ただし、文化財ではありませんから、「釘を打ってはいけない」、「動かしはいけない」ということはなく、一定程度の変化を許容します。「失われることもあるけれど、それは市民の心次第」という考え方です。



文化遺産の構成

最後に文化遺産の構成についてお話ししたいと思います。例えば、ここに一つの文化遺産がある。これはいくつかの構成要素・文化資源によって構成されています。そして、また別の遺産がある。例えば「萩城下町」という文化遺産がある、一方で「明治維新」という文化遺産があったとする。1つのおたからが重なっています。例えば高杉晋作の旧宅の井戸があったとします。萩城下町という遺産の中で、それは「武家屋敷の井戸」という意味を持ちます。一方、明治維新の遺産の中では、「高杉晋作が使った井戸」という意味を持ちます。もっとほかの意味づけがあるかもしれません。一つの遺産が複数の意味・価値を持つ。そうやって惜しみなく拾い上げる、重複なども恐れずに、必要なストーリーを描いたら、それを構成要素に取り入れていくことが必要です。

そしてみんなで大事にする、おもしろがる、というこ

とをやっていけば、観光にも景観にも教育にも使えるということを考えています。そして、まさにそれをやろうとする活動そのものが市民の方の生きがいになっていくと考えています。

太宰府ではそういう市民遺産会議を真剣に開いておりまして、私も議長を務めている関係で、中に深く関わっていて、決して楽なことではなく、大変な悩みもたくさんあるのですが、市民の意識の盛り上がりが定着しています。第1回で登録された4つの太宰府市民遺産、伝統工芸品の「木うそ」、あるコミュニティが何十年と守り続けている盆の送り火の行事、大野城という史跡の中にある、昔、子供たちが通った山の中の通学路を復活してトレッキングツアーとして使おうという活動、太宰府にゆかりの深い芸術家の作品、そういったものを市民目線で集めて、自分たちで守り育てようと思うものを市民遺産として登録していく、ということが太宰府市ではやられていて、これも非常に注目を浴びています。



そして何かこういう活動が日本の文化の基礎を支えていくのではないかと、地域の文化、歴史の文化、を未来に伝えて、基礎を支えていくのだらう、と考えています。今後も、従来通り文化財保護行政はあるのですが、それとはまったく違う次元で、こういう活動が盛んな地域は、魅力的・個性的な町として未来に残っていくでしょう。今からはどんどん都市の間で競争、取捨選択が行われていく非常に残酷な時代が来ると思うのですが、その中で、このような活動は、地域のアイデンティティや地域らしさというものを外にもアピールするし、中においても強くしていく重要な活動になるに違いないと思って、こういう新しい制度の周知・啓発を一生懸命やっているところです。

(2013年8月18日 地域おたからワークショップ)

浜崎地区

平成 25 年度 テーマ先行型

浜崎地区では、伝建地区への選定を機に立ち上がった「浜崎しっちゃん会」の皆さんを中心に、すでに多くのおたから（文化遺産）情報の蓄積がありました。町並み交流施設の運営や年に1度の「浜崎伝建おたから博物館」の実施、「しっちゃんかい？浜崎マップ」の発行など、おたからの活用が進められていることから、本事業のお手本とするとともに、紙資料で整理・保管されている台帳のデジタル化や、今後の展開の検討をしました。おたからの推薦にあたっては、テーマを絞り、それに沿うおたからを厳選してカルテを作成し、登録しました。



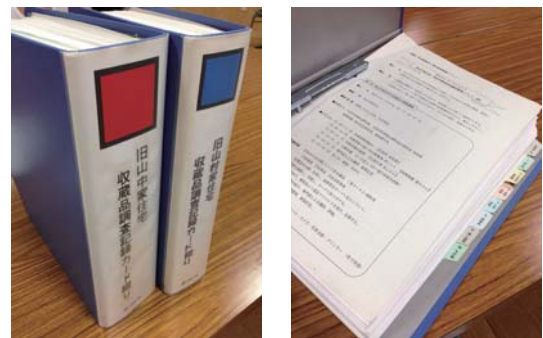
町並み交流施設の一角にある「浜崎博物館」。浜崎の暮らしや商いを伝えるおたからが展示されています。



毎年5月に開催される「浜崎伝建おたから博物館」。町家が公開され、家々のおたからが展示されます。



浜崎で過去に行われた収藏品調査。学芸員の指導のもと、陶器など多くのおたからの記録を作成しました。



左記の調査で作成された記録カード。これが本事業の「おたからカルテ」のお手本のひとつになりました。



地域おたからワークショップでの浜崎の皆さんの様子。おたからの調査と整理について改めて確認しました。



意見交換会の様子。浜崎地区の今後について意見を交わすと共に西山教授からのアドバイスを受けました。

浜崎地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 港で栄えた商家町



旧松本村地区

平成 25 年度 カルテ先行型

旧松本村地区では、「維新の里づくり協議会」の皆さんを中心に、すでに多くのおたから（文化遺産）が調査され、『松陰先生のふるさと』という冊子の発行や、毎年秋の「維新の里歩こう会」の実施など、その活用が進められていることから、ワークショップで先進事例として取り上げました。また、冊子の付録である詳細な「維新のふる里史跡案内図」を元に、その入門編という形でおたからマップを作成しました。カルテの作成・充実を先行して進め、最終的にテーマを絞り込んでおたからを推薦しました。



おたからの調査・整理を例示的に体験するワークショップでは、松陰神社境内のおたからを再発見しました。



ワークショップの様子。有名な史跡以外にも地域の歴史を伝えるおたからがあることを改めて確認しました。



意見交換会では、旧松本村地区の今後について意見を交わすと共に西山教授からのアドバイスを受けました。



地域の古老や、その方の話を伝え聴いてきた皆さんが集まり、カルテを作成・充実させていきました。



第 10 回維新の里歩こう会を、本事業の地域交流イベントとして共催しました。



おたからに親しんでもらおうと、ポイントごとの説明に加えクイズラリー方式のコースを設定しました。

旧松本村地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 松陰先生のふるさと、旧松本村



むつみ地域

平成 25 年度 カルテ先行型

むつみ地域では、合併前にまとめられた「むつみ文化財要覧」を元にカルテを作成すると共に、新たなおたからの掘り起こしのため、23 回にわたる現地調査を行いました。調査では、地質、考古、景観など様々な分野のおたからや、むつみの農耕に関する行事や各集落の小祠・野仏、石碑などを拾い上げました。また、地域交流イベントでは、むつみ地域の農産物やそれを生み出す大地もおたからとして取り上げました。カルテの作成を先行して進め、それらを包括するようなストーリーを考え、ひとつのテーマにまとめ、おたからとして推薦しました。



かつて庄屋を務めていたというお宅で、家の方の案内のもと、調査しました。



現地調査の様子。土地の持ち主の方にも同行してもらい、由来や関わりを聞き出していきます。



川平溪谷と博打岩の調査。なぜそこにあるのか由来を調べるとともに、石質や大きさなども確かめます。



調査では写真による記録も重要で、おたから候補そのものはもちろん、周囲の様子も記録します。



地域交流イベントは地元の方によるガイドを大事にしています。手作りパネルでよりわかりやすくなります。



イベントでは、千石台で作られる千石台大根も、大地と人が生み出したおたからとして収穫体験をしました。

むつみ地域から推薦・認定・登録されたおたから

- ◆ 恵まれた自然地形と
先人から引き継がれてきた田園風景
暮らしの証（あかし）



旭地域・明木地区

平成 25 年度 カルテ先行型

明木地区では、地元の歴史や文化に詳しい方々と地図上でおたからの候補を挙げ、それを現地で確認する形で調査を進めました。かつての宿駅町である明木市を中心に、周辺の農村地域の集落ごとに、「町並み」「街道」「人の物語」「集落ごとの心のよりどころ」など様々な小テーマでおたからを拾い上げていき、最終的には「街道と人」に焦点を置いた大きなテーマを設定して絞り込み、推薦しました。また、地域交流イベントでは、地元住民によるガイドに加え、「カメラとおさんぽ」という要素も盛り込み、まち歩きを楽しむ方の幅を広げました。



まず、地区の大きな地図を広げて、ふせんでおたからの候補をどんどん挙げていきました。



8月には、明木を事例としておたからの調査と情報整理を体験するワークショップを行いました。



ワークショップでは、地元だからわかる「おたから」に加え、外の目から見た「おたから」も拾い上げました。



現地調査では、その集落に昔から住んでいる人や、昔の人から話を聴いてきた人へのヒアリングも大切です。



地域交流イベントでは、前半は地元明木の方のガイドで集落を歩き、街道の宿駅・明木市の特徴を学びました。



イベント後半は各自で明木市の魅力を写真におさめてもらい、それをプロの写真家に講評してもらいました。

旭地域明木地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 街道による人・物の交流と
思いやりの中で生まれ栄えた
明木のおたから



旭地域・佐々並地区

平成 25 年度 カルテ先行型

佐々並地区では、既に別の事業で住民自らが足元を見つめ直す「あるもの探し」が実施され、史跡や伝統行事、暮らしの知恵など、地域の財産が集落ごとに絵地図にまとめられていました。本事業では、その蓄積を生かしてカルテを作成し、包括的なテーマを設定して、全てを佐々並のおたからとして推薦しました。また、伝建地区や各集落の絵地図から情報を選択し、佐々並全体を紹介するマップを作成しました。そして、地域交流イベントとして「ささなみ伝建まちなみ探訪」を「萩往還佐々並どうしんてやろう会」の皆さんと共催しました。



各集落ごとに地元住民が再発見したおたからの情報と絵地図がまとめられていたものをカルテ化しました。



カルテやマップの作成にあたっては、絵地図では表しきれない詳細な位置を地図上で確認していききました。



佐々並の各所で大事にされているお地藏様。地藏婚やお地藏様のお接待（地藏盆）などの風習もおたからです。



毎年秋の「佐々並おいでん祭」で「ささなみ伝建まちなみ探訪クイズラリー&ガイドツアー」が行われます。



祭りの最中であれば、誰もが気軽にいつでも参加できるクイズラリーでおたからに親しめるしくみです。



まちなみ探訪の参加者には、佐々並の伝統食のおたからである甘粥（あまぎゃー）の接待がありました。

旭地域佐々並地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 萩往還の宿場町を中心に栄えた
心のよりどころ、佐々並



堀内・平安古・城下町地区

平成 26 年度 カルテ先行型

堀内・平安古・城下町地区は、伝建地区や史跡としてすでに多くの資料やマップがあるため、それらを整理しカルテ化することから取り組みを進めました。おたからの推薦にあたっては、大河ドラマの放映や明治維新 150 年の機会に合わせ、幕末・明治維新に関わる人物や史跡、当時の様子を伝える風景など、テーマを絞って推薦し、また、それらにまつわる場所やストーリーを紹介するマップの作成を行いました。事業後の地元堀内地区町内会による研修会では、このマップを活用した歴史探訪も行われました。



萩まちじゅう博物館推進委員会堀内分会のメンバーを中心に、最初の協議で取り組みの方針を固めました。



毎年行われる堀内町内会による研修会。平成 26 年度は外堀や北の総門、城下町などを巡るコースでした。



地元の研修会には調査スタッフも参加し、おたからの場所や由来、概要を確認していきます。



すでに文化財に指定されているものでも、テーマにまつわる逸話などがないか、聞き取り調査をしました。



これまでの観光パンフレットでは紹介されなかった情報が盛りだくさんのおたからマップが完成しました。



平成 27 年 6 月の地元の研修会では、おたからマップを片手に、堀内から平安古にかけて歩きました。

堀内・平安古・城下町地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 維新の志士が往来した
当時の風景を今も残すまち



土原地区

平成 26 年度 テーマ先行型

土原地区では、「土原歴史散策ぶらぶら通り委員会」の皆さんが地区内の歴史や史跡をまとめた冊子「土原歴史散策」を発行するなど、すでに情報の蓄積がある一方で、幕末に活躍した志士の旧宅跡を示す石碑などは多くあるものの、建築物など形あるものが少ないことを懸念していました。そこで、6月のおたからワークショップをきっかけに土原地区のストーリーをあらかじめ組み立て、そのテーマに沿っておたからを選択し、カルテの作成を行いました。また、調査を重ねる中で町割りを示す基礎石の価値を再発見し、その分布も記録しました。



土原歴史散策ぶらぶら通り委員会の皆さんが集まり、方針やカルテの中身について話し合いました。



6月のワークショップで、おたからをつなぐストーリーを考えたことで、テーマの方向性が定まりました。



カルテの作成のため、改めてそのおたからの関係者へのヒアリング調査なども行いました。



地域交流イベントでは、まず、歴史に詳しいメンバーによる「土原の歴史見どころ案内トーク」を行いました。



その後、まち歩きへと出発し、トークの中で説明したおたからやおすすめの風景を現地で見てまわりました。



小川家長屋門では、その一部を開放して土原歴史散策ぶらぶら通り委員会による情報提供が行われています。

土原地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 松本川に育まれた人々と 武家の町割り



川上地域

平成 26 年度 テーマ先行型

川上地域では、まず最初の打ち合わせで、川上の歴史や暮らしを語る上で欠かせない「阿武川」を大きなテーマとして持ち、その中でおたから候補となるものを挙げていこう、という方針を決めました。次に、地域全体の地図を広げておたから候補をふせんで書き出し、旧村時代に発行されていた地域の文化財を紹介する資料や現地調査などを元に、カルテの作成を進めました。最終的には、上流の長門峡も含めた阿武川という自然とともに生きた川上の人々の歴史や営みを語るストーリーを考え、推薦するおたからをまとめていきました。



最初の打ち合わせで、「阿武川」を大きなテーマとして決め、地図におたから候補を書き出していきました。



山々に囲まれ多くの支流が流れ込む阿武川は、滝も多いことから、滝めぐりツアーに同行し調査しました。



阿武川上流の長門峡も調査し、火山の影響を受けた地層や阿武川の起源などのストーリーを再発見しました。



阿武川に沿った山里に暮らした人々の営みに着目し、川船や養蚕の道具もおたからとして取り上げました。



地域交流イベントは、紅葉の時期に合わせ、長門峡を歩くことをメインに企画しました。



川上の人々の暮らしを守った平助・権太の二義民の物語とそれを伝える地蔵や石碑もおたからです。

川上地域から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 阿武川とともに生きた 山里の歴史と営み



福栄地域

平成 26 年度 カルテ先行型

福栄地域では、隠れキリシタン伝説や紫福八十八ヶ所など様々なおたから候補はあるものの、共通のテーマは考えにくい状況であったことから、おたからカルテの作成を先行して進めました。また、大板山たたら製鉄遺跡が「明治日本の産業革命遺産」の構成資産として世界遺産（当時は候補）となり、今後注目を集めることが想定されていたため、製鉄遺跡以外にも福栄には様々なおたからがあることを伝えようとマップの作成も進めました。最終的には、「信仰の里」という全体をつなぐテーマを見つけ出し、おたからとして推薦しました。



最初の協議では、テーマを始めから絞らず、おたからの候補はどんどん拾い上げようという方針でスタート。



紫福八十八ヶ所は、古い記録や地元の方の記憶をたよりに一ヶ所ずつ確認をしていきました。



地域交流イベントでは「世界遺産を先取り」として、大板山たたら製鉄遺跡を地元の方がガイドしました。



イベントでは「福栄の実り」として、ぶどう収穫体験や地元食材を使った昼食も楽しむプランにしました。



イベントやマップをきっかけに、他地域の老人サロンのみなさんが福栄を訪れるツアーにも繋がりました。



さらに、世界遺産を巡る観光客を迎えるため、おたからマップを元にした観光案内看板も作られました。

福栄地域から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 深い山々にいざなわれた 信仰の里



三見地区

平成 26 年度 カルテ先行型

三見地区では、「三位ふるさと史の会」の皆さんを中心に、「三見あれこれ」や「三見の歴史」など、すでに多くのおたから情報の蓄積がありました。また、おたからの説明板や保全・復元を自らの手で整備し、地元住民が文化財を再認識するための「三見歩こう会」の開催や小学校のふるさと学習との連携など、本事業のお手本となる取り組みが進められてきました。そこで、既存情報のカルテ化・デジタルデータ化を主に進め、おたからの推薦にあたっては、多くの中から、特に街道や人々の往来に関わるものに絞り込んで推薦・登録しました。



三位ふるさと史の会を中心に、社寺の関係者なども含めて「三見おたから実行委員会」が組織されました。



三見公民館報に連載された「三見あれこれ」。三見の歴史や自然、文化が紹介され、情報が蓄積されてきました。



地元の強い思いによって登録有形文化財に登録された三見橋。看板整備や清掃なども有志で行われています。



宿駅・三見の札場の跡も、三位ふるさと史の会の皆さんが自分たちの手によって復元整備が行われました。



三見小学校のふるさと学習を支援し、地区の歴史・自然・文化のおたからを児童たちに伝えています。



イベントでの地元の方によるガイド。看板や歌など、わかりやすく伝えるための工夫が随所にあります。

三見地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 赤間関街道の宿駅町として発達した三見市と街道の変遷



川島・藍場川地区

平成 27 年度 テーマ先行型

川島・藍場川地区では、江戸時代に整備され地区の景観のシンボルともいえる「藍場川」を大きなテーマとして、その流れに沿って存在するおたからの拾い上げを行いました。川の水を利用するハトバや池泉庭園、かつて川舟が通っていた頃の高くなった石橋などをひとつひとつ確認していきました。また、地区出身で後に活躍した人々や筋名や聖講など川島の暮らしや文化のおたからについてもカルテを作成しました。おたからの推薦にあたっては、「川」や「暮らし」、「風景」、「歴史」などの言葉を並べてテーマを熟考しました。



萩まちじゅう博物館推進委員会藍場川部会の皆さんを中心に、まず地図上でおたからを挙げていきました。



池泉庭園があることはわかっている、「どこにいくつある」かは地図を持って歩いて初めて記録できました。



池泉庭園を持つお宅へのヒアリング調査。水質や鯉などの生き物も含めた環境への意識の高さが伺えました。



樹木、ハトバ、石橋についても確認を進め、詳細は別リストで管理する要素群として記録しました。



大火をきっかけに農家の有志で組まれた「聖講」によって毎年秋の天神祭りに奉納される「聖」も記録しました。



畑地や屋敷地を囲む生垣も、地区の景観を創り出すおたからのひとつであることを再認識しました。

川島・藍場川地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 人々の暮らしにとけこんだ 藍場川と川島の風景と歴史



笠山・越ヶ浜地区

平成 27 年度 カルテ先行型

笠山・越ヶ浜地区では、食・生活風習・祭り・自然・景観など様々なテーマで、まずは自分たちが大切だと思うもの・越ヶ浜独特のものなどをリストアップし、持ち寄って整理していこうという方針でスタートしました。また、地域交流イベントでは、すでに萩の観光スポットになっている笠山や椿群生林だけではなく、越ヶ浜の漁業集落や食を紹介するような内容にすることが企画されました。おたからの推薦では、イベントのテーマにもなった漁業集落の暮らしと文化を中心に、地質や植物などの自然も含めたストーリーにまとめました。



打ち合わせの様子。過去のマップや地元の方の記憶、漁協だよりの記録などを参考にカルテを作成しました。



現地調査の様子。昔からこの地に住んでいる方から、おたからの情報を収集して、メモしていきます。



地域交流イベントでは、地元の漁師の方に頼んで、実際の道具や準備の様子を見せていただきました。



イベントでは、迷路のように入り組んだ路地も、地元の人と一緒に歩くことで興味深く回れます。



地元の方によるガイドは、その土地に対する誇りや愛着が込められているからこそ、伝わるものがあります。



ガイドは、越ヶ浜集落の中と越ヶ浜・笠山の自然とで役割分担をしました。

笠山・越ヶ浜地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 越ヶ浜の自然と 漁業集落の暮らしの文化



須佐地域

平成 27 年度 カルテ先行型

須佐地域では、歴史や自然など多くの文化財を有することから、「1つのテーマに絞り込むのは難しいのではないか。」という懸念もあり、まずは、おたからの候補となるものについて、カルテの作成を分担して進めることにしました。各々が作成したカルテを毎回の協議に持ち寄り、説明内容が適切かを全員で確かめるという形をとりました。並行して、おたからマップの作成も進め、推薦するおたからは1テーマに絞っても、マップには様々な分野のおたからを掲載していく、という方針をとりました。今後、他のテーマでの推薦も検討していきます。



協議の様子。多くのおたから情報の蓄積・資料があるからこそ、テーマを絞ることは難しいことでした。



調査の様子。現地で見聞きしたことを書きもらさないように写真やメモ、音声で記録していきます。



調査の様子。現在は山間のおだやかな田園風景のまわりには、中世の山城跡が点在しています。



地域交流イベントでは、まず須佐歴史民俗資料館を見学。多くの資料から須佐を知ることができます。



各所でのガイドは、萩まちじゅう博物館推進委員会須佐部会メンバーで分担をしました。



高山を臨み須佐湾を見下ろす丘にある益田家墓所。史跡とともにそこから眺める景観も大事なおたからです。

須佐地域から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 幕末・明治維新と日本の近代化を支えた須佐



田万川地域

平成 27 年度 テーマ先行型

田万川地域では、田万川部会の皆さんを中心に、最初の協議で「海とともに生きるまち」と「山とともに生きるまち」という大まかな枠をつくり、地域のおたから候補を分野別に挙げていきました。その中で関連性のあるものをまとめてストーリーを考え、メンバーの得意分野で分担してカルテの作成を進めました。地域交流イベントでは、地元で人気の「平山台まつり」にタイミングを合わせるとともに、テーマをさらに検討して「海彦・里彦・山彦 三彦を巡る旅路」というタイトルを作り、それが最終的なおたから推薦のテーマにもつながりました。



ホワイトボードを使っておたから候補を書き出していました。文字にすることで連想も広がります。



面積の広い地域では地元住民にも正確な場所があまり知られていない場合もあるので、現地調査が重要です。



現地調査。一見すれば普通のお墓ですが、実は松陰門下生のものだった、という物語が隠されていました。



調査では、地図上での正確なおたからの位置を確認することも重要です。カルテには緯度・経度で表します。



地域交流イベントでは、江崎湾を一望する橋からスタート。おたからを眺めるビューポイントも大切です。



イベントの後半は平山台の果樹園ツアー。果樹生産組合の方のガイドで、クイズも交えて楽しく歩きました。

田万川地域から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 田万川のおたからを育んだ
海彦・里彦・山彦



大井地区

平成 27 年度 カルテ先行型

大井地区では、すでに「大井ふる里愛好会」によるおたから情報の蓄積があり、それらを改めてカルテに整理することを進めました。会の中に新たに委員会を立ち上げ、メンバーで役割分担をしてカルテを作成。さらに、その完成度を向上させるために定期的に会議を開き、内容を読み合わせてお互いに補うなどのチームプレイでカルテが完成しました。また、地域交流イベントでは、大井の一番よい季節に訪れてほしいとの思いから、早めに準備を始め、地元の女性手作りの昼食など、五感を使って大井を再発見できる内容になりました。



事前打ち合わせの様子。これまでに大井ふる里愛好会で集めた文化遺産の写真など多くの資料がありました。



大井ふる里愛好会・大井地区文化遺産特別委員会の会議の様子。皆さんが熱心で、意見も飛び交います。



円光寺古墳跡の調査。線路と道路のそばなので、説明する場所や理解しやすくするための資料を検討します。



穴観音古墳の調査。イベントの前なので見学の際の周囲の環境（掃除状況や蚊など）もチェックしておきます。



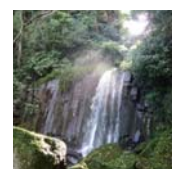
地域交流イベントの様子。足場の急な場所でのガイドは、班を分けて交互に説明・移動するなど工夫をします。



イベントの昼食では、大井の女性の皆さんに地元の食材を使った手作りの料理をふるまっていただきました。

大井地区から推薦・認定・登録されたおたから

◆ 古代の息吹が今にいきづく 阿牟（あむ）の里・大井



各地域から推薦され、認定・登録されたおたからや、作成されたおたからマップは、萩データベースでも紹介しています。

萩データベース URL : machihaku.city.lg.jp/db/

萩おたからハンドブック

萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業 2013-2015 活動報告書

発行日 平成 28 年 (2016) 3 月 31 日

発行・編集 萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業実行委員会